



「御手洗井戸」

一行はきれいな水を得るために井戸を掘りました。上陸して汚れた手をその水で洗ったので「御手洗井戸」とよびました。この井戸は民家の庭に今でも残っています。寺井の地名は「手洗い」が訛ったものと言われます。

この井戸は8世紀になって再び掘られ、この地に来ていた高僧行基によって「照江」と名付けられました。その後、火災・疫病などが続き、「寺井」と改称されました。その後、僧侶の手によってこの井戸に蓋（ふた）がされてしまいました。いつしか忘れ去られた井戸でしたが、言い伝えに基づいて大正時代に調査が行われ、井の字型の角丸太と5個の石が発見され、徐福の掘った井戸に間違いはないとされました。

しばらく滞在していた徐福一行でしたが、漁師が漁網に渋柿の汁を塗るため、その臭いがまがでず、この地を去ることにしました。去るとき、何か記念に残るものと考え、中国から持ってきた「ビャクシン」の種を植えました。白檀に似ているというビャクシンは天に向かってまっすぐに伸び、樹齢2200年以上経った今も元気な葉をつけています。この地域では、新北（にきた）神社のご神木でもあるビャクシンは国内ではここにしかないと言われ、徐福伝説が真実であることを証明しています。（実は本州、伊豆半島の大瀬崎一帯に百数十本のビャクシン樹林があります。大瀬崎は伊豆半島の西海岸側の根元にあり、徐福一行が最後に上陸したとされる静岡県富士市あるいは沼津市と向き合っています。）



新北神社と「ビャクシン」

(佐賀県佐賀郡諸富町)



佐賀市金立町千布交差点より北を見る

北に向かって歩き始めた一行でしたが、この地は広大な干潟地であり、葦原であり、とにかく歩きにくい所でした。そこで、持ってきた布を地面に敷いてその上を歩くことにしました。ちょうど千反の布を使い切ったので、ここを「千布（ちふ）」と呼ぶことにしました。使った布は、千駄ヶ原又は千布塚と言うところで処分しました。